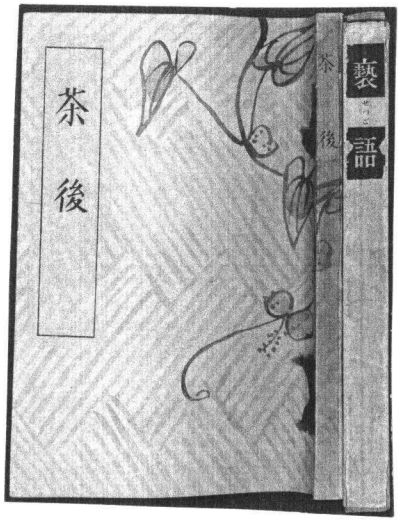富士崎放江（ふじさきほうこう）　随筆家、俳人。明治七年十二月二十七日新潟県水原生れ、昭和五年九月九日歿（一八七四―一九三〇）。本名和一郎。別號方壺、放江庵主人、江湖放浪庵主人、雅峰等。早く母を亡くし、祖母に養はれた。諸處放浪の末、明治二十五年福島に至り、『會津日報』記者、次（つい）で『福島民友新聞』に入社し、在籍してゐた矢田稲雲を俳友として句作に勤んだ。また同宿寄寓してゐた矢田部村とは殊に親交、後年に一人で「未摘花」通解を試みるなどしてゐる。一方社務の傍ら江戸期随筆文藝の殆どを讀破、更に浮世繪にも通じ、その蘊蓄を随筆『茶後』（大正十五年十月十日坂本書店「芋蔓草紙」）、『藪語』（昭和二十二年一月一日有光書房）に著はした。